

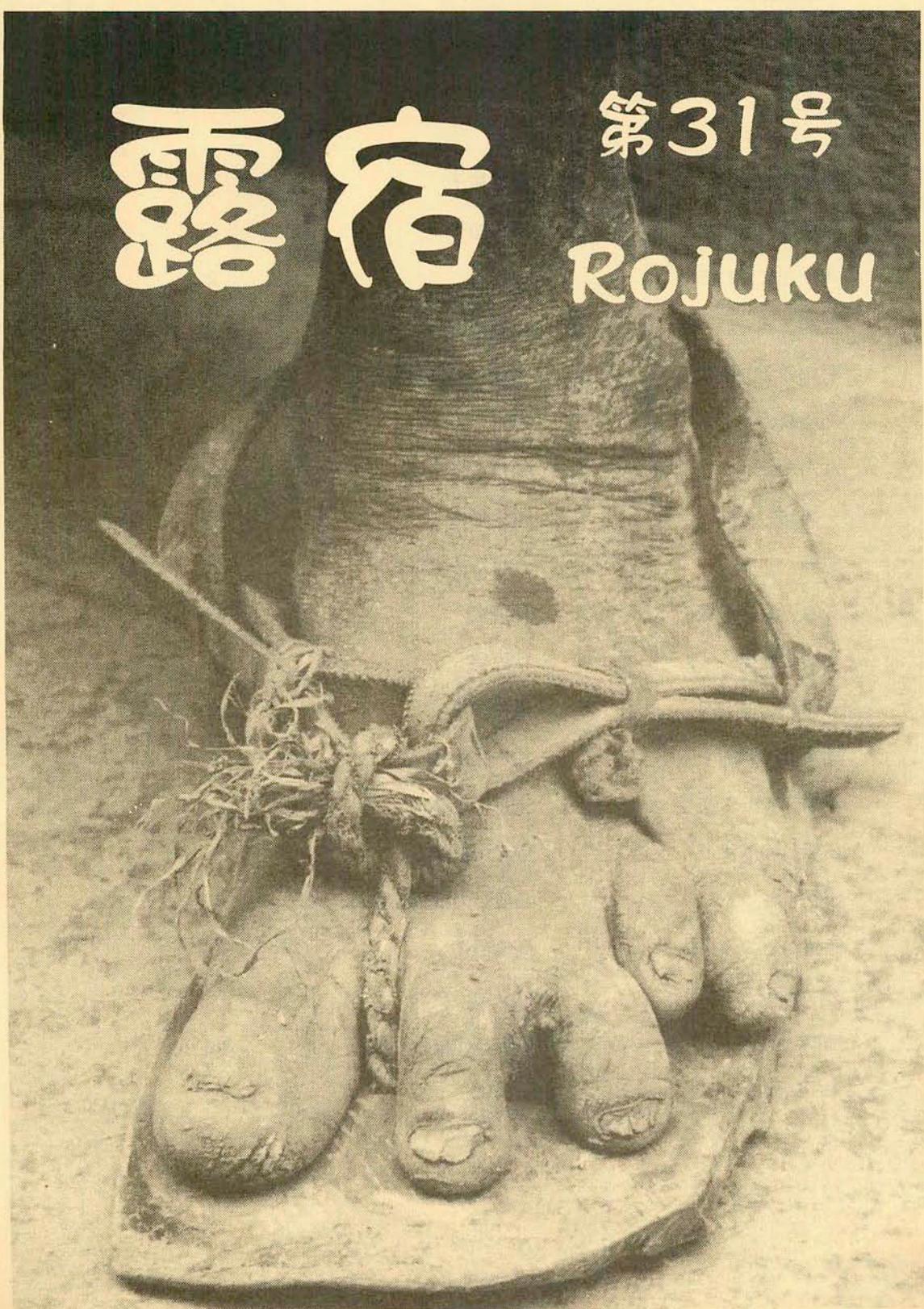
路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

2004年7月1日発行

露宿

第31号

Rojuku



露宿

目次

表紙写真	藁科祐子	
文中写真	岡田知子	
再々起に賭ける	いさむ	2
無題二編	五林修	3
戸山のテントより	名無しの権兵衛さん	9
ある夜のパトロール	宗春	11
なんだ坂、こんな坂	ゆげこうすけ	12
…雑句、愚句	田代猛	13
無題	クソだめ男（お）	15
ジョーンズの豆の木	秋戸空	17
生命の強盗	秋戸空	18
五行詩	近松雅之	20
朝太郎の箱船	鈴木克彦(挿し絵も)	21
新編マンモス交番	望月大成(挿し絵も)	25
宿無しの散歩道	中津川あゆみ	29
山谷 他	名無しの権兵衛さん	35
惑星ひとつぶ通信	高橋美香	36
あかい花	はり師いが丸	37
地獄 他	名無しの権兵衛さん	38
編集後記		

再々起に賭ける

いさむ

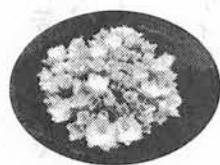
まずは巻頭に露宿三十号発刊おめでとう。我乍ら胸がつまる思いで一杯です。毎月編集局から郵送されている露宿を郵便受けから取り出し手にした瞬間、紙上にの仲間の声や支援者の声に元気づけられてる。各自の記載された文字を読んで行くと、落ち込んでいる場合ではない、落ち込む理由も無いんじやないかと、自身に言い聞かし、持病より生きていると云う現実を喜ぶべきである。

生きている喜こびが何は無くとも宝である。

私はこの五月が誕生日の月である。我乍ら長く此處まで生きのびたと思う。その影には新宿連絡会があり、自立生活センターもやいの支援者及仲間がいたからである。今の生活は完全に自立とはいえない。未だ支援者の方々にはまともに顔を合はず立場ではない愚な我を心苦しく思う。要介護を受け週二度、中野区にあるディサービスセンターに通所し幼稚な体操をしたり、リハビリを受けていて腰痛もいくらか回復して來た。

杖を頼りに先日もやいの集会が下落合第二地域センターで開催される事を聞き、一年半振りに出席した。会議室に入った途端数多い互助会員の顔を見、驚いて足が一步下がった。

動乱の 七転八起 我はいま
伴せを この身で感す 新緑に
翔ばたけ空に 舞え鯉のぼり
なかまが祝う 誕生会



しさを感じ、もやい互助会も進歩し健やかな感じがした。なつかしい仲間がいる、始めて見る友もいる。内藤さん、佐藤さんが、身体の方は大丈夫ですか、と言葉をかけられた時、砂をもつかむ思いで、扉を開け長い間御無沙汰していたにも拘らず皆の笑顔に感涙すると共に、もやいと云う絆に始めて底深い温情に一時は我をも忘れ只茫然とするばかりである。

これからは身体が良くなれば 新宿連絡会支援の毎日曜日にも顔をだし私が出来る範囲の手伝いもし、もやいの行事集会にも参加する様尚一層努力が必要である事を思い知らせられ、再起決断が私の使命でもあり、当然の事である。

先は私が通所しているディサービスの職員の方々や利用者の皆さんが私の誕生日を祝つて頂きました。私より年長者に祝つて貰い、感無量な想ひと、各支援者の厚意がこの誕生日で忘却出来ない節目となり、頑張らなければならぬと言う信念が沸いて来ました。

外は緑の鮮やかさと、あじさいの花も色づいて来ました。六月五日には京都にて集会もあり新宿夏祭りも近づいて来る。もたもたしていらっしゃれない、再起すべきだ、何が何んでもど……

無題

五林修

二編



離れ難く思う時、ハロー、グッバイ、サンキュー。つまり、あばよ。

ところで一步を踏み出す事、そんなに苦しい事でしょうか？ 一步が、きつい事は確か。でも、日常から脱するためには、考えていい事ではないでしょうか。

旅ゆけばアレ、そこに露宿があるばかりイ

多少の不便はあるが、何気ない普段の生活に僕は満足している。

知らない場所での生活が、慣れ親しむことで生起する煩らいから、少しだけ僕を解放してくれる様だ。今日は、今日である。

東京を出発した一月十日から約一ヶ月間のぶらりぶらりの旅も、終盤にかかっている。物見遊山の旅であろうと、何だろうと、旅は旅である。

そこに路があり、一步を踏み出すだけで、心持ちも幾分か変る。

やがて帰る街も、季節の変化の兆しには鈍感なのだろうが、それはそれでいい。

知らぬ存ぜぬ、見ざる聞かざる言わざる。逆に、何かに好奇の目をむけ、見て、聞いて、言つて、訳の分からぬ知つたか振りで、時に笑い、時に泣く。

旅先で見る生活に、そうだそんな生活の仕方もあつたのかと改めて驚く事だつて、あるはずですよ。

誤解のない様に、書き添えておきますが、私は日本トーベルビューローの社員では、ありません。

私は、ボランティアでホームレスを続いている野宿者です。

人生に酒あり、でも旅もあり、友もあり。ないのは、
錢。^{せん}

船も出ない港町新宿からイカリをあげてカムチャツカあたりへ。ところで、マダカスカルにマグロを漁りに行つた、

勇太君の御父さん由紀子が首を長くして待っています。
しつかり働いて、帰つてください。

路銀欠乏症のため、天王寺スティーシヨンビルの打ち崩し作業に行つて参ります。土方結構。

どこへ行かずとも、地球は銀河を旅していて。

旅人である事を、忘れた人が旅に出たりする。

花一輪を見てすごす。宇宙の旅だつて身近にあります。

ありもしない事が、有るという驚きを忘れ、人よど

こへ行くのだ。

歩道に寝倉が出来、アーケードの灯も消え、近所の猫達が歩き回る。

僕達が寝静まる頃、地球の裏側で目醒めるホームレス達。

彼等が寝着くころに、僕等は起き上がる。

一時期、私はどうでもなりやがれと自暴自棄になつていてた。やがて野垂れ死に願望と路上での生活の葛藤の種を自らまき、刈り取る破目となるのだが数年前はまだその事に気づいてはいない。

条理で囲まれた都人の生活と、生きる事の不条理とが、私の心を戦場として、戦闘を開始したのであつた。

山谷で、よく言われる“黙つて野垂れ死ぬな！”の言葉に、奇異な響を覚えていた私は、どう考えても死の瞬間つまり息を引き取るその瞬間には、誰れも皆、黙つてゆくものであるとか考えられなかつたのである。

何かに依存しなければならない姿を露骨に示しておきながら、言葉では別の領域を疾駆するか如き卑しさを、私は見たのだ。

共に生きようとさけば社会への、さきやかな抵抗でもあつた闘いに疲れ、私は、病いという休息を得た。

我ながら、絶妙のタイミングで病いが体を訪問してくれたのである。タイミングだけではなく、病名も私の希望通りのものだつたのだ。

死に至る病の路を、奈落の果てに落ちようと私は懸命だつたのだ。

正確に、自覚された以上、この病いからの回復は早いものだつた。

死に至る。何と魅力的である事か。



私は、路上での死との闘いに無条件降伏をした。事実、私には死を喰い止める事など出来はしないし、そうしようとする事の無益さをも充分に味わい、静かに生活する事を会得し、そうする事が出来る。
滅入と解脱が一如一身となつて、この身に現れ出たのである。

囮い込まれ、その中で脱出する事が状況を変える事に、あまりにも気をとられる余り、氣本体が狂い、そして病み、病むことで我が身に死を招き寄せたのである。

野垂れ死にとは、私の身の上のささいな痛みでしかなかつたのだが、なぜ野で生きようとはしなかつたのか。私には、どうでも良い事となつたのだ。

私はふらり旅に出、街を歩き、自然と人を都市の中に観ている。無力な自分にはどうすることも出来ない事は“静かに受け入れてよい”神よ、見棄てないで、いただきたい。

路上生活者が、読み、書く…露宿…。
読み書きする路上生活者を、何と呼ぼうか、露宿人とでもするとするか。

親は子に、なんでまた読み書きなど教え込むのであ

ろうか。文字が考えているのであって、人は文字に操作されている事にそう気づきはしないでいる。

読み書きは出来ずとも生きてはゆけますが、よく生きる為には必要です。

誰れかに手紙を書き思いを伝えようとする時に、困るんじやあ有りませんか。

別に、困りはしませんよ。友達に語ると、友達が文章化してくれるんです。

無題 〈2〉



ここまで書いて、私の本日の作業は、夜勤と確定いたしました。

朝寝場酒は中止し、西成にでもフラット行つて来るか。

気配りじやあない気散しでウロウロするか。
大阪路上ぶらぶら、右手にしつかりワンカップ握りしめてウロウロ歩くだけの暇潰しです。

文章の表現力をつけ、自分の言葉で書く為に

① Voice^{ボイス}を押えて、出来れば消す。

② 映像を見る。トーキーの世界に入滅そして解脱

③ 自分の感じた書を書く。

ホーム・レスつまり生活能力の欠如と考える。
確かにそうなのだ。生活は苦しいのだ。

生活の苦しさが、そのまま悲惨な状態と考えられる。
実にそうで、生活と呼べない現実がある。

そこから“自立”という事が考えられる。それは、そ
れで良いのだが、何か考え方違いをしてはいなか?

ホーム・レスと言う立場の人には、生活能力がある
だろうし、改めて“自立”とは何かを真剣に考える必要
もないのではないだろうか。これは、あくまでも私個
人の思いでしかない。

環状線で新今宮駅へ。駅前にセンターラインの路
店が並び、横道にドヤが並ぶ。冷え込みで陽だまりに
人がたむろする。食堂でカレーの大盛りを喰い倒れそ
うになる。黙っている人の姿は少なく、話し込む人が
多い。

土地柄なのか、山谷とは雰囲気がちがう。
文庫本一冊、百円で買う。井上ひさし“十二通りの
手紙”暇になつたら部屋で読むつもりでいる。

腹を満たしたら眠くなる。夜勤なので、風呂に行
き少し休む。

夜、イスラエル、パレスチナの報道番組を見る。
テロを日常とする国民の一票は“力の支配”しか選択
肢のない事を受け入れざるを得ない結果となつてゐる。
気の重くなる世相に圧倒され、閉塞感に苦しむ人の
姿は、何なのだ。

ともかく、その日暮らしの私は、仕事に就けること
に感謝するしかない。一月も、明日で終るが先々の事
をあれやこれ考えるだけでは仕様がない。

いま私は、夜勤の仕事を終えたところで、正直、少
し眠りたい。今夜の準備もあるから、少し眠つて白日
夢でも見る。目を閉じて見る現実の裏道で、体をやす
め、又動く。

労使共闘で乗り切る難局ですか!?、建設業では、人
減らしが進んでいますけど、總理、我々のシノギはどう
なるんです。とりあえず、一風呂浴びボーットして
みます。

風呂の中で思つた。

あれやこれと泡のように湧いて来る思いに、身を沈
め、体と心を暖める風呂である。その湯舟の乗り手は、
唯々、ボーットしている。それで良いのだ。
春の選抜高校野球代表戦も決まり、プロもキャンプ

インのニュースに、春近しの感を受ける。暖かくなつたら東京へ帰る予定だが、出来るだけ早めたい気もある。

ホーム・レスが、ホーム・シックになるか？なるのだよ。

体をよじり、手のひらで、腰を押す。



仕事にも馴れ、調子もあがつて来る頃に、起きるのが、事故である。飛来落下墜落、地山の崩壊そして重機事故が三大災害と言われる。

災害防止の為の設備は万全であるにも係らず、人的ミスによって事故は起きる。

昨年十二月、知人が横断中に車にはねられた。又、現場で鉄板に左手小指、薬指をはさみ第二関節より切断。また、生保受給者が飲酒中に喧嘩沙汰に巻き込まれ転居する事となつた。同様に生保者が、これもまた飲み屋店内でゆすられた。

相談には乗るが、当事者の意志を優先させている。

“後悔は、先に立たず”と云われるが、とりあえずの善後策だけはとる。支えあう関係である。出来るだけの事はしたい。

孤立しない、させない、で何がどう変る現実ではないのかも知れない。それでも、知らぬ存ぜぬ御身御大事で済まされないのが、路上の生活である。

馴れあう事もあるにはあるが、ここ一番ともなれば腰が引けたりもする。“愛別離苦”もまた生きている証しなのだと思ふ。

“七正義七伝”の文庫本をプレゼントされたが、まだ読んでいない。読みたい本がありすぎる。

今日で一月は終る。一年の計は、元旦にあり、私は何の関係もない事です。特別に、何か思い入れする程の事はなく、あつたとしても、すぐ忘れてしまうから気が楽に生活できるから。

やつて来る二月は、冷え込みに負けずできるだけ体を動かすようにして。腐用症候群というそうだが、筋肉も動かしていないと、体力が落ちてしまうらしい。乾いた空気に痛むかと心配していた肺の具合も、検査結果では別状なしということなので、まずは一安心しています。五年間で三回の入院は、不摂生を続けた自分の責任の方が、大きかった。食事、睡眠、入浴、気分転換、そして作業へと方向づけられる様になりつつある事だけは、確かです。

調子のよい時だけではないので、無理だけはしないと心掛けています。

Systemの使用可能状態を維持、向上させ初期に於ける集中性、以後の継戦性を確保し、初期の戦闘目的を完遂せよ。

黒川君と初めて会ったのは、田無市にある雇用促進住宅の改修足場架けをしていた七年程前の事である。上水沿いに畠が広がる穏やかな町に建つ地上十階建ての共同住宅も、築三十年を経て外部の風化がひどく、薬注補強と外壁塗装を施こそうという工事であつた。

彼を私に引き合ってくれたのは、職長酒井克洋氏である。「五林、お前に似た奴に会わせてやる。」と言われ、昼食時に会わせてもらつた。

それから、何もなく数ヶ月が経つたような、飯場での部屋住みである。“黒やん”“ハヤシ”と互いを呼ばれ、話してみれば同様の経歴を持ち、誕生日も一日違いつつあって意気投合した訳ではないが、相応の付き合いの出来る関係となつた。

当時、黒川君は右手の不自由を訴えていて、年齢的な事もあり生活保護を申請する事となつた。“俺は、九州の炭鉱太郎よ！”と、酒を飲むと口癖が出る一本気な男である。台東区福祉事務所で、“生活できりやあ、相談になど来るか！”と係員を一喝したが為に、相談は打ち切りとなる。

倦土重来。台東区が駄目なら、新宿とするだけの事である。

人に親切にできるだけ、彼には友も多い。もちろん、私を含め悪友は多いのだが、何とはなしにもめても丸く収まってしまうという按配である。

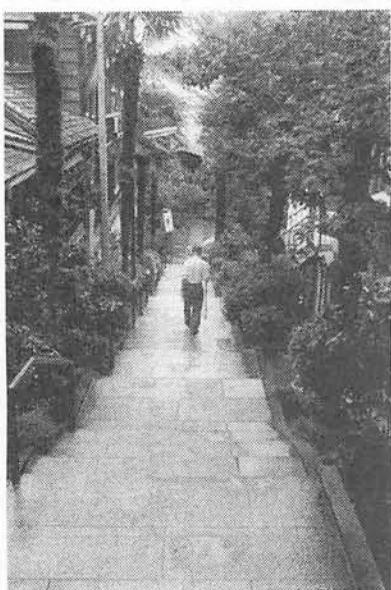
彼の本年の願いは、青森、下北、恐山に行く事である。岩手に生れ育った私が案内役を勤める次第。何が

起きるかは、その時の御樂みとしておきましょう。恐山の地獄谷とは言え、山谷の地獄育ちの両名が、不思議を考えたところで成るようになるところが、不思議といふものである。

ぶらぶら歩いてゆくのだが、何百何千時間もかかる。互いに航空隊上り、“車の免許はないが、飛行ライセンスはある。”

旅は道づれ、世は情。水戸街道をぶらり、して講道館で見よう見真似の座学をして、して何とする。朝食に納豆でゆきたいが、残念な事に九州男児は酒と賭博には強いが“なつとう”には弱い。玉子焼きでもつけ出して付け、歩くか空をよ、美津雄。

西成から山谷に帰るから、待つてな。



戸山のテントより

路上生活者としての私達にとつて、二日前の川崎での市と市民との中にて交わされたとする合意書云々のニュースをきき、まず第一歩目のあゆみあいだけであつて、確かに見方によつては、明かるいかすかなる光を感じる事が出来るのだが……。この先、どの様になつて行くのか、まだまだヨダン出来ない。現実面にむかつて、さまざま点をどこでどの様にするのだろうかと……。

名無しの権平衛さん

いると思える東京都の「地域生活移行支援事業」だが、発表されても具体的なものが整理されていないという中にて、さまざまな情報うわさだけが入りこみ、そのさまざまなものだから……。

屋を世話するというのかエンジヨンする行いをしているとの事だつた。その間二ヶ月位、そこにて生活する様になるとの事だつた。さて、路上生活者と言つても、さまざまである。

どこから線引きしていくのか、これこそ、根深いシンコクな事である。

その辺をキチンとしなければ、
それ以上に問題悪化するものなのだ。
だ。現実者の声の真実を知らなく
てはならない事なのだ。それを判
断するだけの実タイを知る事なの
だ。

める事も出来るのではないかと思
い、行つてきた。

区の方では、まだ具体化はして
いないけれど、五月すぎ頃から、
公園内に相談員を常駐させて相談

マドロとする予定のあるとの返答
だった。そして、現在行なつてい
る事は、大田寮を通して、そこで
世話となる者の中から自立支援セ
ンターに移行し、そこででききどり
調査、健康診断等受けたのち、部

のです。

その点の所をキチンとしないか
ぎりキチンとした結果が出ないの
です。

ここではこの件は省略します。

書きたい思いがあるけれど（笑）。

誰もが好きこのんでテント生活
をしているのではないのです。皆、
それぞれの事情があつて、日払い
にて、手がるに仕事にありつける
というので、この高田馬場へ来て
いるのです。そしてここでがんば
って、人並みの生活へ戻ろうとし
てきていたのです。安いアパート
から、サウナ利用などでの生活を
して、けれども、仕事の柱となる
高田馬場にも、さまざまなもの等
があつて、そうした中にて、一つ
いアパート代が出来なくなり、こ
こで生活する事で交通費もいらざ
たのです。結果サウナ利用等、安
日仕事に行けば数日は生活出来る
のです。けれども、だからといつ
てあまんじている者ばかりではな

いのです。

数年一ヶ所（手配師、飯場の番

頭、会社の人）から仕事をもらつ
て生活している人もいるのです。

手配師、飯場の番頭、会社の人達

もさまざまな事情があつて正常で
はないのです。けれども、そこに

しがみつきがんばっている者もい

るのですが、金が貯まるにはほど

遠い生活なのです。とても十万、
二十万などたまらないのです。た

めで、ここからはなれていく人も

いますけれど（笑）。けれどタイ

ハンが流されるかなんとかふみど
どまつてているかなのです。そうし

た者の中には現在区の行なつてい

る大田寮云々など利用しないし、

新しい事よりなれた事をなれた人

間との思いが強いのです。

こうした者には二ヶ月もはなれ

るという事は、今の仕事をやめて

といふことにひとしいのです。な

んとかふみどまつている者には

……

今、すぐに低家賃のアパート、

都営住宅の提供というものは、よ

だれの出る位のミリヨクと自立の
チャンスとどちらでいる者もいる

のです。

そうした者へのハイジョとか目
がまつたく向けられていな事に

強い怒りというのか、イラダチが
あります。流される者が区等に甘

えるのです。

この点の所を理解、又提言を願

います。がんばつてある者、この

辺の所の者に区が協力する様に伝

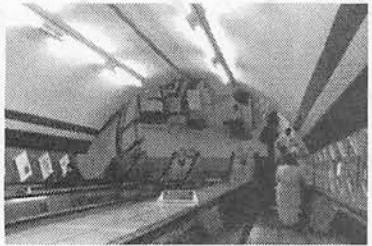
えていただきたいのです。なんと

か部屋さえあれば自立がすぐにも

出来るのにと考えている人のいる

事を!!





ある夜のパトロール

宗春

長い間の不況で行き場を失つた三人組の男性の物語である。ともに路上生活者の実態を証すこの東京の街の中で大勢のリストラされた人々、失業してその三人の男性もホームレスになつたばかりだと思われる。会社員のような服装をしていたが、髪の毛はボサボサなのに身なりは洋服は清潔なのに手などは薄汚れている、何かアンバランスに見える男なのだ。私はジット見ていたが、やわら三人組が歩き始めた。

夜も一時過ぎ、人通りが途絶えた新宿の街で駅の近くのマクドナルドの前で三人組を見た。目はキヨロキヨロしながらそのお店のまえで三人三様足を止めたのである。すでに店は閉められ特大のゴミ袋の山となつている。その袋を一つずつ重みを確かめるところの袋の中からハンバーグが七、八個出て来た。それを大事そうにバックの中に入れ立ち去つた。これからどこへ行くのか少し後をつけてみた。この所路上生活者が多く見られる。住みにくい世の中になつたものだと思いなげかわしいばかりである。

新宿西口駅の地下街に入り人通りの多い昼間と違つてホームレスの人たちが集まつて来る地下広場が一寝宅化となるのである。

終電車もすべて発車して人通の絶えたあちこちにおそらく百人以上の人達が新聞紙にくるまつて、ある人はダンボールの中にいる人が寒さをこらえながら寝ている。それからサラリーマン風の人もいる。この東京、都会的で不思議な光景にみえた。

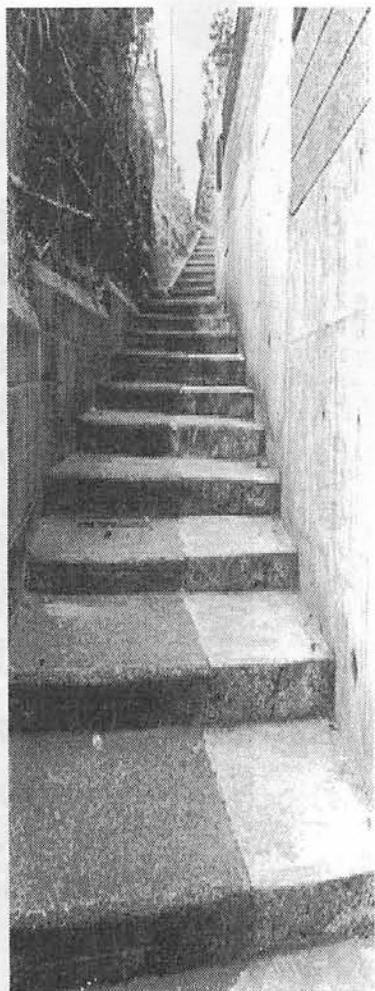
路上生活者の食料調達法と体を休める所の確保は困難である。こうした事情は仕事もなく家もなく家族すらないからだ。さて、話を元に戻すと多くの路上生活も可食するすべてを身に付けて生きているのだ。

新宿周辺のコンビニやマクドナルド等の店舗から期限ぎれのゴミ袋の中からパンやオニギリが入つているのである。これから暑い夏になると路上生活者もこうした残りものを食し危険な態度で一度や二度は七転八倒の苦るしみを味つたことがあるだろう。

日本に於ける食料率が年々下がつてゐる今の現実の中、因果応報自然の復讐をと思わずただ祈るばかりである。

深夜の街々今日も食べ物を求めて徘徊するであろう。あまりにも現実とかけはなれた困難な世の中になつたものと言わざるを得ない。

最後に何千何万人という路上生活者に対しても保障問題を一日も早く決めて住みよい日本国であつてほしい。



(一) あれが千鳥か、可愛いいじやないか、
親を慕つて、チヨチヨと、
親は幼な子、あやして遊び、
月の浜辺で、啼いている。

△なんだ坂、こんな坂、所以坂、
親と子供の、登り坂△

なんだ坂、こんな坂

ゆげこうすけ



(二) 思い出すのさ、子供の頃を、
親に甘えて、泣いてたね、
親も達者で、昨日のようだ、
遠いあの日が、懐かしい。

△なんだ坂、こんな、彼岸坂、
親子千鳥に、魅せられて△

(三) 僕も人の子、親父になつて、
親の気持ちが、分かつたよ、
親が待つて、故郷の村へ、
今日は此の子の顔見せに。

△なんだ坂、こんな坂、所以坂、
親と子供が、通る道△

事を寄せて風を呼ぶ人生の 回転木馬との雑句、懸句

田代 猛



- 一、今日一日晴れてしまふに昏れゆけば祈り
のごときタゆうべあかね茜あほさす
- 一、この花が飛ぶと覚えし我花びら一つちぎ
つて吹く
- 一、路地の端に立つ電柱に思はずよろけり寄
りたり老の悲しさ
- 一、逃れても逃れられない宿命の旋律を彈く
朝に入るまで
- 一、自死率がベトナム戦を越ゆといふ砂漠に
残る深きぬかるみ
- 一、憎しみはなにもうまない山櫻はらはらと
散るしづかを土に
- 一、昨日まで空室なりしアパートの窓ほのぼの
と春の灯ともる
- 一、独り居の淋しき馴れし身にあれど連休とる
れば人恋しき
- 一、静寂はこんなものかと一人居の吾が身をつ
つむ空氣冷たし
- 一、人生の隙間すきまを覗く思ひして聞くともなし聞く車中の話
- 一、夕暮とうめいれて見えざるものに呑まれゆく歳月と
いう透明な扉とびら
- 一、我的手のパン屑くずを食しハト過ぎ去り日我を
慰めしハトなりか

(中央公園にて)

「日朝首脳会談を思ひて」

一、聽診器当てゆく主治医見つめる時我が
命救ひし人と思えば心熱きをおぼゆ
一、知ることの喜びよりも知らぬことの不
幸を知つてほしい平和
一、遂げざることなお遠ざかる老い先に老
うく光る我の薄ら水

一、我が居室にアジサイの白き鉢我と語る
友の一人として咲き番る
一、仲間なく組織によらず背る曲げて反戦
デモ行く嵐の日比谷を

「新宿連絡会の炊き出しを思ひて」
一、一炊一飯に秘められた生きる心の糧なり
「イラク人人質自己責任論飛び散る中
十八才の今井君を思ひて」
一、英雄視も蔑視もせずに語らしめよイラ
クで見て來しものを
一、しなければ自己責任は何も無く白く乾
きぬ

小雨にぬれてアジサイの花ビラ咲き番る季節
と自然なるれど、日々社会は動く歴史は動く、
人々も明日に向つて動く、動く、自らを生きる
爲に力いっぱい懸命に動く動く……。

露宿も歴史と共に動く、一〇〇号へ向つて希
望の夢を託して力強く動く、動く……。

初夏の如きさわやかなる青空の日々に記す

五月二十五日

雪路

宿第30号、おめでとうございます。

露宿に、文章をのせたいと思って、書くぞ、書くぞ、とハリキッテいたのだけど、30号を読んで、元気がなくなつた。

炊き出しほか（秋戸空ほか）の文章、朝太郎の箱船（鈴木克彦）の文章を読んだからだ。

炊き出しほか、は、そのものズバリ、タマシイが表現されている。

朝太郎の箱船は、スゴイ思想である。

オレは、このような文章は、書けない。

暑いころ、文章を習つたことがあるのだが、こんな文章を書くことはできない。どうしようか？ オレは、悩む。

オレは、はじめに考えていたとおり、事情があつて、本名では書けないから、クリだめ男というペンネームで、ナンセンス詞を、書くことにする。

横浜や、八王子で、クリーニングの仕事をやつていたのだが、ようじょうをする時、お前はダメだ、ダメだ、ヘタクリと、怒られてばかりいた。

ダメ男だ、ダメ男だ、といわれた。

だからクリだめ男という、ペンネームを、使う。

ナンセンス詞とは、何だ？

へんなこと、考えるな、といわれるのだが、作品の、できばえみてほしい。タマシイの表現や、スゴイ思想はない。

だけど、ノートに、何年も、何年も、続けて、書いていたものを、発表したいのだ。

クソだめ男（お）

一

おばあさんの水あそび

バツちゃん
バツちゃん

みんなー、となく
ミン・ミン・ミンではない

つくつくぼうしが、つくづくはしい、

となく
つくつくぼうし・つくつくぼうし
ではない

タンボンになりたかーた、おち○ち○
コンドームになりたかーた、おマ○コ

ひぐらしが、カネ・カネ・カネ・カネ、となく
かな・かな・かなではない

しょ、しょ、少々ジ
しょしょジのお庭
まつ、まつ、まつ赤を、血が出て
ジ・ジ・ジ

永田町のセミを、一日中、聞いているとー

四

たつた、コレだけで
數万円
ソレだけで
バイアグラ

みんなー、みんなー、みんなー
つくづく欲しい、つくづく欲しい
金・金・金

えらいコチヤ
えらいコチヤ
よい よい よい

だから、とっても、よい紅茶
宣伝文を、考えたー

この紅茶は、アメリカのブッシュが
飲んだ、紅茶
この紅茶は、イギリスのサッチャードが
飲んだ、紅茶
だから、えらい人が飲む
えらい紅茶

六

「ダメ男だ、こりや」 いかりや
「どうも、失礼しました」 カトーチャン

クソだめ男（お）

アブラゼミが、みんなー、みんなー
永田町のセミはー
永田町のセミ

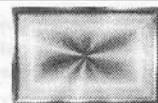
アブラゼミが、みんなー、みんなー

永田町 政治の本音
セミの声

ジョーンズの豆の木

(思想) 1

'01・8・3
秋戸 空



上の方に昇られて真（まこと）
を見られてしまつたら
こまるから・と

ジョーンズは仕事欲や名声欲も
持つてはいないではないか！

すくすく伸び始めていた

ジョーンズの豆の木は

ある時突然に！

根元から「バツサリ」と

切られてしまつた

豆の木を切り倒して

しまつた人たちは・

何がほしかつたのか・？

昇ろうとした人たちを

（合法的）に撃ち落としておいて

（僕は、裏切りもののように見て
いた）

けれど・・・ジョーンズの心と

豆の木がほしかつたのだ・！

一つづぶでもいいから

種がほしかつたのだ

（高見 順 詩行）

枝だけではなかつたのだ

豆の木を知ろうと

その木を知ろうと

昇ろうとした人たちもいたけど

「法律」という

まるつきりのエン罪なのに

（合法的）に鉄錐で

撃ち落とされてしまつた

狭く小さな庭
僕の庭に・・・
種をまき僕のおしつこ（詩）でも
かけて早く育つのを

眺めていたかつたのだ

豆の木よ、天までのぼれ・と
(高見 順 詩行)

その種から

思想の実がなりだして

沢山の人たちに食べさせたら

こまつてしまふ人たち・は

押し合い、へし合わずにも

こんな豆の木など

すぐにでも踏み潰せるから

と・・・

ジョーンズの豆の木は

天にのぼるほどすばらしい

ことは、ないだろうに・・・

僕の手には知らない内には

撃ち殺されてしまつた詩は

残されたけど・・・

ジョーンズの豆の木は

何時か人間から（高見 順 詩 も

奪い取られてしまふだろう



生命（いのち）の強盗

’99
秋戸
空26



私の両手・私は両手は
あつた・私は両手で
眼を被い指の隙間から
覗えた太陽・私の太陽は
その広さしかない太陽だつた
眩しかつたけれど···

この汚れきつた街···
太陽だけはと・喰いた
土すら無くなつてしまつた街
ちよつとした土があり
その際間から・まばらに
草（生命）いのちが生えていた
生きていた··!

この生命力を少しでも
分けてもらおう···と
想つていた···私

寒風にさらされても
吹き倒されもしないで
殺然として立つてある
草たち・生命（いのち）たち
ほんのたまにつむじ風・吹き
アスファルトにされて
忽然と消されていった
草たち・生命（いのち）の事も
見ていた私・一つの
源風景が私の心の中で
生きていとも···
でもしかし〈どっぷり〉と、
ぬるま湯につかつてしまつた
〈世間〉
そう感じさせている

浮き上がつてはこなかつた反逆
その流された血でもつて
お前たち（権力）の
ピストルの弾（たま）を···
刀の刃をボロボロに
腐蝕させて···と願う

（マスマデイア）と（天皇）と
（プロ・スポーツ）
ナショナリズム意識
これらに一とつくりに
されてしまつた（世間）
露宿労働者と（世間）の問の
（反目）は

（先進国、国家内）の（世の中）
魂は燃えつきた勝算のない
反逆のなかに···（金沢河詩行）

「キャピタル」どもは……

新植民地主義なるものによつて

民の作り出した富を收奪する

多国籍企業と称して

泡を喰つて「Karençy」

を飲みこむIMF

強盗世界を築き上げたIMF

ボスのUSA、それに従う

プリティシユ、イスラエルとも

(ニッポン)も従つてゐる

それも「合法的」にだ!!と

「世間」とは民でもある・だけど

露宿者も民であるのだ!

これらの間に「反目」を

意図も簡単に

投げ入れる「スマーディア」

こう云うゴマカシ装置を持つ

「支配権力、金の力」

この装置を有効に

使うために……

「Karençy」

を掻き集めるため

（金）を湯水のように使い……

この装置はあらゆる方向に

のびていて民は

そこにたどり付くようにな

出来ていて

ここにある「反目」は

そうしないと

民は生きられなくなるから……と

「支配（強盗）権力」……IMF

どこの地においても

民を「反目」で

ぶつかり合わせて……

自分達の「懐（ふところ）」さえ

膨らんでいれば

何人の民が死のうが兵隊だから

かまいやしない……と

(非戦闘員が死んでも……)

あつち、こつち、で「極地戦（内

戦）」の

タネを

ばらまかせているこの連中の子分

「CIAと先進国のスパイ組織」

この惑星の救いは、アフリカ大陸

から

出てくるであろう・「キャピタ

ル」に

対する叛乱の鬪い、新自由主義は

いらない!・と

そして世界に溢れている野宿着

たちだ!!

この連中の吐き出す「金」

「Karençy」に

ごまかされるな!!



五行詩

構造改革

近松 雅之

猫伝

危険を察知
身を隠せ
丸め込め
様子を伺い
飛びかれ

明日

明日は
どこですか
どこだろう
行きたい場所は
どこでしよう

自己責任

自己責任を叫ぶ
責任のない声
耳を貸すな
それより先に
払つとけ

選挙

立候補者は
金持ばかり
能力主義を推し進める
投票率を下げてやれ
私は行きます念のため



朝太郎の箱船

連載 20回 第二編

第二 海賊船出現の巻 三 ハンランの章



鈴木 克彦
山下 金七 作

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

三、ハンランの章

騒擾とは—不平分子が集まり騒いで社会の秩序を乱すこと—その組織の綱紀が紊乱し威令が全く行なわれず混乱に陥ることナリ

語り部は フォンな空気が流れ出したる船のミライを憂う つまりが ガイアナの大量集団自殺 またブランビデアン（一説にフリチンビデアン）の如く武力で戦い 武力に圧えられ殺される—

あるいは○キ集団（朝太郎のマルキとは別）の如く 組織が暴かれ 大量の信者が検挙され裁判となり 教祖は信者に罪をナスリつけ 信者は教祖をノノシリわめいて 四分五裂になりはしないかと

現に 天つ御使のことばさながら 声もひえやかに（注）陰謀がささやかれている 反乱志向 反乱嗜好しまだまた石頭寺本頑児闘争の二の舞いになるのではないかと

この機に乗じて やつかいな神がかかりがのし上がり 石頭らと手に手を取り合つて 大乗愚者思想の如く大船で死出の山を乗り越えるのではないかと

このゲンショウはどうやら 人々のワキタツ心が巨母の像を造ろうとして集つたはいいが 朝太郎にニベもなく否定されたことに始まつたらしくまずはハンラン分子らのことばを聽こう 入りては則ち不孝 出てては則ち反逆 不忠 謹みなくて不信 汎く衆を憎んで悪に親しみ 余力有りては則ち船をうがつ」

ほれみろ 所詮朝太郎の善惡規範なんて人には分からぬ みなイイカゲンで矛盾だらけ カジヨウ防衛と過剰猜疑心 そんな輩がおよそ考えられない論法で異常なアイデアをひねり出すではないか

「音にキク朝太郎の悪義は 痴狂人の妥協の上に成り立っている 心は放任しておけば様々のものに固執し社会を破壊してしまうと 自由を唱えながら相互監視と弾圧をくり返し 人権を無視し 愚民主義と野獸主義を押しつけた」

それごらん 語り部には彼らバカズリスト達がリコールつてバカ騒ぎを起そうとしていると思えない 石頭門徒衆に代つて トーフ頭の芸術家や タ太郎に代表されるシンパが神をアクラマととり違えたブルイギョ業がカッタルク ウンチ

に代り科学的な発電その他のコー業技術をとり入れたノーリツ人が自分と社會に目ざめ 科学の象徴と人間性重視の巨母を造ろうとして培つた力 イジメルギーとイジメラレルギーがブツツブされて 今度は神志向を模索し彷徨し始めた

止メレ止メレ三文石頭 神もアクマも分からぬ三等教祖 始めに神なく終りにアクマなしの宇宙運行の概理を神アクマのせいにするな そんな物差しで判断するな

人のウンメイ時勢は常に一寸先の間お前ら狂人の仮面を被つた輩は のど元すぐればやはり ホームレスに石をぶつけ ライ患者に部屋をカサズ エーズ人を嫌い 己を絶対とし他を差別する者 それでいて 頭を压えつけられないと生きぬ輩

古今東西 人間には上中下の三種ありあらゆる国家 主義思想 毛物達もこれを踏襲してきた 朝太郎の痴狂

ケド お前ら予言者 指導者 石頭らは 騙されにくく 疑いぶかい 暗示にかかりにくいやつらを抱え込んで朝太郎に代わつて船を支配した

いと思う者はばかり アニマルファームの支配者はやはり人間であつたと

「いう喩えが分からんか
お前らミンナ騙されている アクマ
なんか 信じるな 神にユルシを
乞い 我らの非を許してもらつて
幸と健康を祈ろう」

そして彼らは武器を集め出す バイプ
鉄骨棒切れと以前にはなかつた大量
破壊兵器

彼ら痴呆やアホーに我々人間の歴史と
文化と知性が潰されてたまるかと狂

氣の怨念を燃やし始める この世の中
に神の国やユートピア 法華世界
を願わそうとする

「痴狂人を救い 彼らに愛をもつて奉
仕することは尊い 我々も今後こ
れを教訓としよう だがこの船は

痴狂人によって動かされたのでも
なく みな生活も痴狂人によつ
て安定したものでもない (手)の力

ンブ人の努力 そして我々(手)ブラ
クに送り込まれた 知識人 技術

者 役人 医者らの力によつて運
営されてきたのだ

これからはみんなの時代だ みんな
が幸に生きてゆかねばならんのだ
そのためには労働と規律 組織が
必要なのだ」

「バカやキチガイ共に 米つきバッタ
みたいにこびへつらう必要がどこ

にある ゴヤの 黒羊やオーム
下等アクマを拌み倒している絵と
同じじゃないか

土台 彼らが我々を船につれてきた
のは間違いであつた いや彼らは
能力ある我々を手前らが生きるた
め利用したにすぎないのだ

我々がマトモ人であつたからこそ
船は沈みもせず 大混乱の時も虐
殺蛮行を圧え 今日まで上手に生
きてきた

浮浪者 よるべない老人 荒んだパ
ン助 窃盗 変態を導き 船の生
活向上 道具機械 農業畜産の技
術開発 改善改良をしてきたのも
我々だ

そんな者の前に我々の知力体力精神
力を空しくもレベルダウンさせて
まで 和光同塵はないものだ」

「やつと共に悪靈島になど行きたかね
え 船を引き返せ 元の国へ戻り
死病にしてしまう腹」

朝太郎は赤死病の仮面 クソ船の扉
の力ギを海に投げすてて 我々を
海の只中に連れ込んで 全員を赤
死病にしてしまう腹

朝太郎は赤死病の仮面 クソ船の扉
の力ギを海に投げすてて 全員を赤
死病にしてしまう腹

船を引き返せ 元の国へ戻り
たい さもなくばヤラツを全員海
へたき込め

あの呪うべき 心の腐った 罪深い
アクリマで 魔法使いで 詐欺師で
我々をドレイに使つた朝太郎 冷

酷無情 船が沈めや鋼鉢ヨットで
逃げ出すやつめ

あるようになつてしまつた 成るよう
に成つてしまつたのが人間と下らぬ
歴史と文化

神が大洪水を起して アンチゴット組
を滅してみても アクリマが洪水から

ニア建設のためにはヤツラを抹殺す
る以外にない 抹殺せずとも彼らを
オリに入れ必要な時にのみ 出し入
れして使うのがよい——けれどそれで
は朝太郎の絶対平等思想には反する
が——

「力には力だ 彼ら軍團を持つてゐる
それに抗するのは力 ヤツラは食
つている 我らはエビカニ キリ
ボシ大根で力がでん

やはり 今の この有様 生活形態
を破壊するには力がいる 力でバ
カ共をねじ伏せなくては我々の生
活はない」

語り部もそう思う この小賢しく 何
も分からぬ石頭共の理想をクダクに
は力がいる 痴呆人共和国 クレジ

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

悪人を救つてみても どつちにもつきどつちにもつかぬのが ホモサビ
エンス サピエンス
力チヤクチヤなくも ワツタカ ワツ
タカ騒ぐサルのできそこないの死に
ぞこない 万物の不靈長 こいつら
が両手に花持つて 都合のいいよう
にアクマの花と神の花を使い分ける
のだ
それが知識ジンとかいう獸 フンだか
ら焚書抗儒にされ 信者の大弾圧に
なつたのだ
それでは我らがヒーロー朝太郎殿下は
いかがしてオラレルことでしょ
「人の住む大地というものは コンク
リートの道路や高いビルが茂る所
ではない 車は平地を走るもので
はなく岩山を走ればよい
神やアクマの像を造るものではない
神はアクマであつて矛盾している
もの 人間の良心と悪心のような
チエのホの実を食つたところで ア
クマのグドンのダンゴを食つたと
ころで 少しもエラクもバカにも
ならぬもの
死ねばいいのにヤツラは生きていた
いなくなつたと思つていたらまた

出てきやがつた
だがこれもミナすべてアクマさまの
御心シダイ 反乱を才コそつが鎮
めようが 諸行有常 諸法有我
涅槃地獄
チンボみじかし恋せよ女を
赤きくちびる黒くなる間に
新生紀時代 新世界交響曲は アク
マの下のバーべリアンと半獣人の
混成合唱曲

人間以上に動物を欲する者ならば
我々痴呆人 寢ること食うこと着る
ことが幸福 それ以上求めるでない
あなた方は神アクマの像を造つては
ならぬ なぜなら神アクマは空だ
から 空は色にして ブラックホ
ールとホワイトホール ビックバ
ンと膨張と収縮を何百回もくり返
すだけのしろもの
そのひとつ過程にアクマの審判が
あり 人間より動物に近い者をお
許しなさる
そして我々は 暗黒物質の中にのみ
込まれ潰されてゆくだけ そのわ
ずかな時間を 朝太郎船に乗つて
命をナガラエル

だがこれもミナすべてアクマさまの
御心シダイ 反乱を才コそつが鎮
めようが 諸行有常 諸法有我
涅槃地獄
チンボみじかし恋せよ女を
赤きくちびる黒くなる間に
新生紀時代 新世界交響曲は アク
マの下のバーべリアンと半獣人の
混成合唱曲
人間以上に動物を欲する者ならば
我々痴呆人 寝ること食うこと着る
ことが幸福 それ以上求めるでない
あなた方は神アクマの像を造つては
ならぬ なぜなら神アクマは空だ
から 空は色にして ブラックホ
ールとホワイトホール ビックバ
ンと膨張と収縮を何百回もくり返
すだけのしろもの
そのひとつ過程にアクマの審判が
あり 人間より動物に近い者をお
許しなさる
そして我々は 暗黒物質の中にのみ
込まれ潰されてゆくだけ そのわ
ずかな時間を 朝太郎船に乗つて
命をナガラエル

語り部 この世は無為にして ス
ベカラク無為に帰すべし 無為の
中にこそタオ（道） 玄牝はある
べし 無為の前に和光同塵はあり
和光の下にチンボマンボは存在す
る チンボマンボは神なりき チ
ンボマンボはアクマナリ チンボ
マンボこそ梵我一如 涅槃静寂
アクーメン

鎌金術師か形而上学か ワケの分から
ぬ朝太郎の マサシク田分け話など
問題外

その夜も船を守る人々の—航海士やら
釜焚き その他の者が見たモノ そ
れは数日前からレーダーに現われた
朝太郎船を追つて迫る 未確認航行
物体 何やら怪しきものの追跡であ
つた

船の中は再びハンランのキザシ 船の
外は朝太郎船を追う謎の船 それは
快速艇のようについてくる
一体我ら二千五百に足りない痴狂人
④人 痴狂ギジ患者らの運命はいか
になりますやら

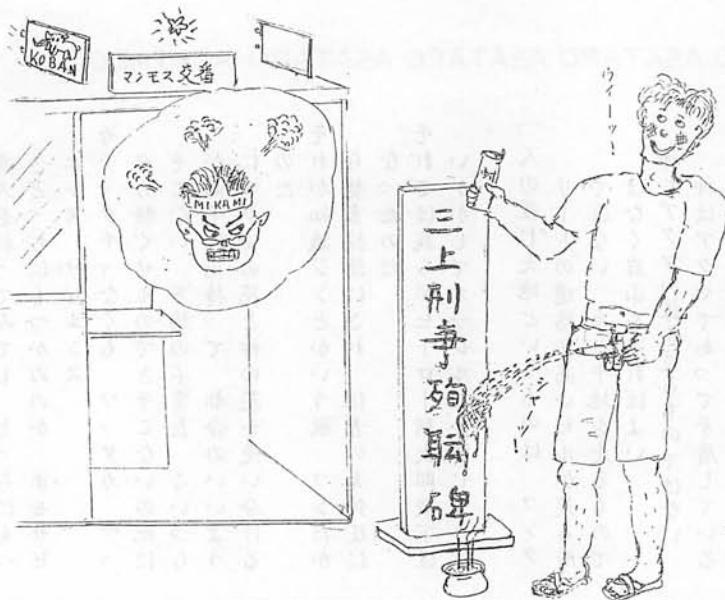
(つづく)

(注)は、引用、書き替えたもので、必
要があれば(著作権などの問題)、これを
正式に届ける用意があります。

新編 マンモス交番

望月大成

PART9



新居でもまたもスパイの監視つき

真の平後免

ヤーコ用なし

大成

スパイとて十手いたゞくガラツハ

おつむパー助

馬よりも以下

元刑事

実体はチャリンチャリンの情報屋

落ちりヤルンベン

新居では山の活動 お去らばで

露宿寄稿は

ソフトボールも

大成

とんでもよ 山は本拠地 これからも

じやんじや本番

やつとこさ 都営住宅 マイホーム
ドヤの七年

雨の三日で

お去らばをして

びつたしとやくぎ屋さんの監視つき

山の延長

がんじがらめは

親方がケチにてあらばスパイまで
いつもビー、

錢貸してとて

大成

たこ入道 八股のおろちの威を借りて
たこ足八本

ゴーサイン待ち

元刑事

チャンスあり 本拠はすでに確保済み
サイン一発

次の獲物は

スパイにはゼニコ持たせよ 三上殿
君のふところ
痛むわけなし

ふところが痛むはずなし 何でけち

しみたれスパイ

星が迷惑

人間性 あらばワルサはできぬなり

百万ドルの

錢積まれても

ほろぶちゃん だまされるなけれ 君よりも
まだ上があり

名は三上とて

萩崎

山のこと 本社と呼べよ 絶対に

我等の正体

人に知らせず

元刑事・解

小手先の裏のカラクリ 三上流

スペイの正体

鴨のつうゝ

宵越しの金も持たずのブータロー

明日のことは

明日吹く風

口あけば鳶だゝの空いぱり

エリート気取り

馬のレベルで

棚上げにして

センセーをけち呼ばわりはひどいなり

シブチン三上

大成・解

冷たきは君はほんとに大ドケチ

訪ねて行くも

茶も出さぬでは

スパイなら客人ならず 当り前

一石二鳥

粗つても無駄

萩崎

ドけちしてやらせのたかり 忍者の手
三上そろバチ
えびす顔して

尻尾丸出し

萩崎

一つ家もがつちりスパイの番屋付き
けちの三上は

もとのまゝにて

くる奴は三上仕込の山天狗

ない鼻出して

大えばかりして

粗つても無駄

馬子

セイセーをけち呼ばわりはひどいなり

シブチン三上

棚上げにして

大成・解

それは策 けちと呼ばせてお財布の

中味バチリン

後のかり屋

田中長官

君の責任

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

とびとでも馬人の内 年取れば

福祉事務所が

九抱えて

後のかり屋

スパイには市民のモラル まるつきし

田中長官

君の責任

大成

お財布の覗きはやめよ 趣味悪し

スカート覗き

まだ御愛敬

元刑事

お財布の探りぞまさに三上流

たかりするには

まずはふところ

大成

親方に泳がせなりとからかわれ

そのわけ知らず

間の抜けた奴

元刑事

泳がせの意味さえ知らぬ馬男

これぞスパイが

よくぞ務まり

大成

こりもせず雑魚を使つてボロさらし

お目々覚ますは

いつのことやら

元刑事

安上がり 馬を使えば経費浮き

裏金がっぽり

盆と正月

金町の義理人情はまがい物

どんな貸しでも

倍の取立て

やくざ屋が東京土建の労働者

一目瞭然

桜田のひも

借財も探りの手口 錢貸して

たつた二週の

貯金なりとて

スペイでも山谷の馬は無駄の口

馬人よりも

まだ下の格

忍者ごろゝ

前世は森の石松 現世で
国粹に大神さえ知らぬ奴

天下の右翼が

聞いて呆れて

大成のおかげで奴も有名人

テンショーダイジン

仇名付きにて

自称肝付き

大いばり 南は薩摩 肝付郡

肝はなくとも

大成

I.Q.は十二の子供 三上以下

生れはサツマ

『サツ』の石松

悪太郎 悪太郎とて大いばり

字がお間違え

芥郎では

荻崎じや使い道なし バカでなし

ハサミでもなし

底なしのイモ

バカなれど裏にはちゃんと指南役

三上、金ノ字

忍者ごろゝ

前世は森の石松 現世で

両目開眼

目明盲は

大成のおかげで奴も有名人

テンショーダイジン

仇名付きにて

路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

大成

錢貸して まずは一発 三上流

やおら本番

たかり屋の後

元刑事

借財もたかりの手口 三上流

桜田忍法

マニユアルの内

大成

絶対に露宿は読むな 忍者指示

実名掲載

いまだ知らぬは

馬子

ひよつとして読まぬふりしておとぼけ屋

腹の内で

煮え湯わかして

猫四四 悪戦苦闘 やくざ屋の

犬の面道

見る余裕なし

忍者三上

薄らバカ 三人寄れば文沫とや

につくき大成

何かい、知惠

金の字

ゴーサイン はよ出しなはれ 三上はん

大成殺れば

万事解決

殺し屋

あんな奴 泉と同じ カーンタン

ちょいとひねれば

鶏の首

大成

スパイにてスパイのお役目 まるで駄目

星の居所さえ

雲の上では

大成

当り前 貰つたぜニコは右左

競艇遊び

ふる舞いの酒

近頃は忍者が奇策 ほめ殺し

センセ呼ばわり

雑魚の荻崎

忍者三上

大成をジャンジヤ宣伝 ガチリコン

大センセーは

山の英雄

大成・影の声

金町が憎しみ込めてジロリンコ

五林と二人

山を歩けば

福祉受け サツにお貢い 医者はたゞ

それでも足りず

ついは大成

近頃はお役所電話 これもたゞ

じゃんじや悪用

錢貸してとて

お役所もサツと共犯 忍者きて

裏で根まわし

寝たふりをさせ

二〇〇四、五、十七 足立一ツ家



宿無しの散歩道

(特攻の常さん)

中津川あゆみ

『第一部』

北野春子は、上野駅の一一番列車が通る軽やかな音で目を覚ました。いつものように自宅を速やかに片付けると、急いでアルバイト先へと向かった。昨晩、友達の清美と遅くまで酒を飲んでいた為、頭の中では、パチンコ玉の様に、コチーン、コチーンと訳の分らない記憶だけが前頭葉のあたりで騒いでいた。

春子の仕事は、スナック店内の後片付けと清掃である。店は朝の三時頃まで営業している為、その日使ったコップや食器などは、そのままにして帰るのであつた。時給千円で二時間で程度の仕事ではあるが、ホームレスの春子にとつては有り難い現金収入である。

春子は仕事が終わると、いつも散歩に岡かける。今日は隅田川の『特攻の常さん』に会いに行くつもりである。

浅草通りを十分ほど歩くと国際通りに出る、そこから少し行くと浅草寺の雷門がある。浅草寺の参道である仲見世通りは、世間の不景気など微塵も感じさせないほどの賑わいをみせて いた。

吾妻橋の観光汽船乗り場を左に曲がると、細長い隅田公園があり、そこ堤防の下にはテラスが有る。常さんのテントはそ

のテラスの中程に在った。
隅田川のテラスには、沢山の青いテントが並んでいる。中には廢材などで内枠を築き、その上にブルーシートを張った立派な小屋も少なくはない。

その中にあって、常さんのテントは、テラスのベンチにシートを縛り付けて、もう片方を棒つきで支えて屋根にしただけの、誠に粗末なものであつた。生活も同様、他のホームレス仲間は携帯のガスコンロや鍋や食器類を備えているのに対し、常さんのテントには驚くほど何も無かつた。有る物といえば、呑み散らかした焼酎のボトルと、たつた一枚の毛布だけである。

いつの頃から常さんが隅田川に住んでいるのか、誰も知らない。しかし、隅田川のホームレスの最長老であることは間違ひなかつた。

いつも無口で無愛想な常さんにも、一つの楽しみが有つた。それは、テラスに集つてくるカモメや雀に餌をやる事である。餌と言つても、他のホームレスから分けて貰つたパンの屑や、食べ残しのラーメンなどが雀達の主食に当てられた。他のホームレス仲間が近づくと一目散に逃げ惑うカモメ達も、常さんがテントから顔を出すと、何処からともなく飛んで来て、餌をねだるのであった。

春子は、常さんと知り合つて二年程になるが、誰一人として『特攻の常さん』のことを明確に知る仲間はいなかつた。ただ、方言から長崎出身であろうこと、そして、春の桜の咲く頃と、夏の暑い一日には精神的に落ち込んでしまう。という事だけは皆が知つていた。

春子は隅田川へ来る途中、仲見世通り近くの酒屋で焼酎のワンカップを八本買つた。勿論、常さんと一杯呑る為である。

春子が常さんのテントに着いた時、常さんはまだ寝ていた。

「常さん、おはよう！」大きな声で起こした。

「なんだ、春ちゃんか」

「『なんだ』はないでしょ、もうお昼だよ、サア起きて、ご飯しようヨ」

春子は茶色のショルダーバッグからビニール袋を取り出した。中にはアルバイト先のスナックに有つた残り物とオニギリが入つていた。

「いつも済んましえンネ」常さんはまだ眠そうである。

春子は「ジャジャジャーン」と、おどけながらバッグの中から焼酎を取り出した。それを見た常さんは、急に目が覚めたらしく、すぐに右手を伸ばした。ワンカップを

一本奪うように受け取ると、不自由な左手で大事そうに押さえながら、一気に飲み干してしまつた。

「常さん、そんな呑み方しないでって、いつも言つてるでしょ」

「済まん、済んましゃん。久し振りじゃけん」そう言つて常さんは皺の深くなつた顔をグニヤグニヤにしながらニッコリと笑つた。一本だけ残つている前歯が、妙に白く輝いて見える。上機嫌である。

「まだ沢山あるから、今日はゆっくり飲もうネ」

春子は途中で拾つてきたダンボールを、常さんと自分との真ん中に敷いて、テープル代わりにした。昨晩のスナックの客は、かなり行儀が悪かつたらしく、

おつまみが沢山残つていた。今日の酒の肴は豪華である。

常さんは、友達が少ない。というより、自分から寄せ付けないのである。この隅田川のテラスには百人近いホームレスが住んでいるのだが、常さんが話をするのは一人か二人、そして春子だけであつた。

春子達が笑い話をしながら楽しく飲んでいると、一人の客が訪ねて来た。言問橋の袂に住んでいる青森という男であつた。酒の匂いを嗅ぎ付けて来たのだ。

青森という名前は本名ではない。青森県

出身だから『青森』と呼んでいるだけで、本名は誰も知らない。

ホームレスのほとんどが、偽名、若しくは通称である。過去と家庭と、借金から逃げている者も少なくはないホームレスの世界では、当然と言えば当然の事である。

しばらくは三人で仲良く飲んでいたのが、飲み手が一人増えた為に、焼酎が足りなくなつてしまつた。春子は又酒屋へ買いに行く事にした。桜の時期も終つたので、常さんを励まそう、と思つて来たのだから、今日は大盤振る舞いである。

焼酎の「大五郎の四リットル入り」を買って帰つて来ると、大変な事態が起つていった。先程まで仲良く飲んでいた青森が、頭から血を流して倒れているのだった。

「どうしたの？」聞いても常さんは放心状態で、じつと上を見たまま答えようとはしなかつた。倒れている青森に「大丈夫？」と聞くと、「大丈夫だ」と答えた。

「俺が悪いんだ」青森が小さな声で話した。「俺が常さんに戦争の時の事を聞いたから、常さん急に怒り出したんだ。・・・春ちゃん、ゴメンヨ。あとで常さんにも謝つといってくれ」

そう言い残して、青森は首に巻いていたタオルで頭を押さえながら、フラフランと言問橋の方へ帰つて行つた。

常さんは黙り込んだまま、一言も話そうとはしない。しかし、春子がコップに焼酎を注いでやると、又一気に飲み干してしまった。その常さんの瞳には、薄つすらと涙が溜まっていた。泣きながら何度も一気に飲んだ。一時間としないうちに焼酎は空になってしまった。

常さんは、完璧なアルコール依存症で、常さんにとって、酒は毒である。という事は春子もよく解っていた。しかし、八十歳にもなる年寄りに、今更、酒を止めろとは、春子にはとても言えなかつた。

酔い潰れて眠つてしまつた常さんの枕元に、何やら黒い布切れのような物がころがつてゐるのを見付けた。春子は「何だろう?」と思いながら拾いあげてみた。よく見ると、防風メガネと耳当ての付いた帽子である。しかし、それが戦闘機に乗るパイロットの飛行帽のことなど、若い春子には知る由も無かつた。

『第二部』

昭和十六年十二月八日、日本海軍は「ニイタカヤマ ノボレ、一二〇八」の暗号にて、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃開始。「トラ、トラ、トラ」(奇襲成功セリ)の無電

を期に、太平洋戦争は勃発した。

一年程は優勢と思えた戦局も、十七年半ばには困窮の度を増していった。それまで、架空の戦果や嘘の戦統をラジオで報じてきた大本営は、「南の島々多数の玉碎が有る」事を正直に国民に伝えざるを得ない所まで來ていた。

東京といわゞ、日本全土で退避訓練や防火訓練が毎日行われ、燈火管制で電球の明りも無く、学生達も勉学どころの騒ぎではなかつたのである。

昭和十八年十二月一日、国は、学生に認められていた微兵猶予の特権を廃止した。

召集された学生達は、各区市町村の公民館などに集められ、微兵検査を受けることになつた。

東京の台東区千束の区民会館にも、約四百人程の学生達が、フンドシ一枚の姿で長い列を作り、検査の順番を待つてゐた。

皆が静かに待つてゐる中で、二人の男が突然喧嘩を始めた。他の学生がそれを見て騒めきだした。憲兵が外から中へ走つて来るのが見えた。憲兵に捕まる大変である。

その時、まるで影の様に一人の男が二人の前に進むと、目にも止まぬ疾きで二人を投げ飛ばした。呆気に取られる二人を尻目に、「こがん所で騒いぢやいかんバイ。憲兵しゃんの来よらすけん、早よう列に戻ら

んといけんバイ」

男は低い声でそう言い残すと、何も無かつたかのよう、元居た列へ帰つて行つた。それを見ていた学生達の中から一齊に拍手と歓呼の声が上がつた。館内に入つて来た憲兵は、喧嘩をしていた二人の事は忘れて、「みんな、静かにしろ」と、一喝しただけで、また外へ出て行つた。かくして、喧嘩をした二人の男には何のお咎めも無かつた。

係官は

「名前は?」と聞いた。

「ハイ、自分の名前は、中村常一であります」と、館内に響き渡る大声で答えた。甲種合格であつた。

十二月八日、中村は志願して、『予科練』海軍飛行予科練習生として、茨城県土浦にある、霞ヶ浦航空隊へ入隊した。

予科練に入ると、すぐに飛行機に乗れるものと思つていたが甘かつた。

入隊してからの訓練は、軍人として的一般教練に始まり、気象学、航空力学、無線等と、ありとあらゆる事を叩き込まれた。前期教育訓練の中で、もつとも辛いのが体力教練であった。腕立て伏せ、腹筋運動、懸垂、持久走と、身体がばらばらになるほど毎日しごかれるのであつた。

半年で予科練を修了すると、次は海軍飛行練習生として、七ヶ月間の待ちに待つた実技飛行に入る。しかし、半年経つたからといって全員が終了出来る訳ではない。教

養科目の一つでも及第点に達しない者は、当然の如く落第となる。終了試験は殊の外難しく、合格する者は五十人中十五人程度、他の者は、二ヶ月間の再教育を受けるのである。再教育を受ける者はまだ良い方で、「落第」という烙印を押される者が何人もいた。その者達は縦桿桿を握ること無く、一般部隊への転属を余儀無くされた。そんな中で、中村常一は全てに於いて甲種合格であり、他の学生達から一目置かれる存在であった。

飛行練習生と成り、長い滑走路の横に有る飛行隊々舎へ移った時、中村は初めて零戦を見た。

国防色に塗られ、その機体の真申には、白く縁取られた赤い日の丸、機首には大きな三枚のプロペラ。これぞ日本が世界に誇る戦闘機『零戦』である。

丹念に整備され、磨き上げられた機体は、銀色の薄光を放っていた。期待に胸ふくらませていた中村であつたが、実際に乗つたのは『赤トンボ』と称される、ベニヤ板にプロペラをくつ付けたよ

うな箱形の練習機であった。

しかし、中村は普通三通間かかる訓練をたつた一週間で卒業してしまった。

毎日が離着陸と急降下の練習と航空図の割り出し計算法の試験の繰り返しである。

そんな中で、週に一度、機銃掃射と爆弾投下の訓練があつた。霞ヶ浦の水面や鹿島灘に於を浮かべて行うのであつたが、ここで中村は最優秀の成績を上げた。隊舎の営内では、誰もが自分の成績を自慢したが、中村は決して口に出すことはなかつた。

練習生教程修了者は、実施部隊において約一カ年の初度の実地訓練を受けて、初めてどうやら一人前となるが、航空母艦や第一線の基幹搭乗員になるには、さらに一カ年くらいの技能訓練を必要としていた。それは搭乗員はたとえ若年であつても、極めて精巧かつ高価な機械を取り扱わねばならないからである。いかに優れた飛行機が造られても、それを乗りこなすだけの搭乗員がいなければこけおどしのカカリにも等しいからである。

いかに優れた飛行機が造られても、それを乗りこなすだけの搭乗員がいなければこけおどしのカカリにも等しく、航空戦をうまく遂行する為には、その飛行機に相応した優秀な搭乗者を必要とする。それができなければ、世界に誇る零戦などの飛行機も宝の持ち腐れになつてしまふのである。

村が一番楽しみにしていたのは、二週間に一度の外出であつた。土曜日の午後に営門を出て、日曜日の夕刻までに帰隊すればよかった。

東京や埼玉、千葉など実家の近い者は帰

宅したが、多くの者は、土浦駅近くに有る桜町の遊郭へ遊びに出かけたが、長崎出身の中村は、隊の営門近くに有る居酒屋で、焼魚と煮付けを肴に一人焼酎を呷るのが好きであった。呑んだ後はその日の内に帰隊し、日曜日は誰も居ない営内で詩を吟じたり、静かに読書を楽しむ、というのが常であつた。

そんなある日、中村がいつもの居酒屋へ向つて歩いていると、「先輩、待つて下さい」と、誰かが呼んだ。

「俺の事か?」と振り向くと、「先輩、自分もお供させて下さい」と、その男は言つた。

「来るのは勝手だが、その『先輩』は止めてくれ、同じ同期じゃなかね」中村がそう言うと、

「否、先輩は先輩です」と、訳の分らない答えが返つて來た。

居酒屋に入ると、二人は共に焼酎を注文した。

「オッ、君も焼酎党な?」

二人は大きな湯飲み茶碗に並々と注がれ

何変わる事のない隊内生活のなかで、中

た焼酎を、一滴溢ることなく一気に呑んだ。

「なかなか遣るじやなかか」

「はい、自分は教練では先輩には勝てませんが、こと酒に関しては絶対に負けませんよ」

「おい、オイ、その『先輩』は無しにしてくれと先刻頼んだではなかか」

男は井上洋一と名乗った。中村から見ると、まだまだ幼さが残る顔立ちはあるが、言葉使いもしつかりとしていて好感が持てた。

「自分は、学内ではしばしば先輩をお見掛けして折りました」

「エッ、大学ですか？」

「はい、そうです」

「それでは君も國學院か？」

「はい、法科に籍ました」

井上は何が嬉しいのか、終始にこやかな顔で、ホッケの塩焼きにかじりついていた。

中村は、國學院大學で文学を専攻していた。

自分には充分な才能など無い、と思いつつも、室生犀星の様に繊細な詩的描写の出来る作家になりたいと、常々思っていた

が、最早その夢を果たす事は無いものと、既に覺悟を決めていた。

東京生まれでチャキツチャキの江戸っ子の井上は、「酒では負けぬ」と豪語してお

きながらも、二時間程で酔ってしまった。回らなくなつた舌で、「先輩、長い付き合いをお願いします」と、何度も何度も繰り返した。中村は、「判つた、分つた」と、井上の肩を軽く叩き乍ら応じていたが、心

の中は虚しさでいっぱいであつた。「長い付き合い」をしたくとも、無理な話である。我々は予科練に志願した時から、特攻で死ぬことが運命づけられているのである。

「先輩、あの時は、有難うございました」と、井上は眼そうな目を擦りながら、中村に頭を下げた。

「あの時つて、何の事な？」中村には

井上から礼を言われるような事は記憶に無かつた。

「微兵検査の日の事ですよ。自分はつまらぬ事で喧嘩をしてしまいました。その時

先輩に力いっぱいぶん投げられまして……でも、そのお陰で憲兵にしょっぴかれずに済みました。本当に感謝しています」

「ああ、君はあん時の……そうか、そうだったとね。痛かつたろうが、申し訳な事がばした。しかし、あん時は、あがんすつか仕方んなかったとばい。辛抱ばしてくれんね」

井上は、中村の話を聞くでもなく、酔い潰れて眠つてしまつた。

その日以来、中村と井上は行動を共にする機会が多くなつた。

桜の花も散り、すっかり葉桜になつてしまつた木の下で、二人が煙草を吸つていた時のこと、

「俺も、この桜のように、お国の為に立派に散つてみせますよ」井上は、春風に流れる空の浮雲を見詰めながら、一人ごとのようになつた。

中村も同様、いつでも死ぬ覚悟は出来てゐた。が、「死ぬ事が立派だ」とか、「桜のように美しく」などと、詩情めいた事などを考へたことは無かつた。唯々、自分が死ぬ事で、父や母、妹達や多くの国民の命を救うことが出来る。そう思えばこそ、予科練に志願したのであつた。

海軍飛行練習生の教育期間は七ヶ月と定められていた。しかし、四ヶ月目に入つた時、中村は教官司令室に呼ばれた。(ついに来た。俺の出番が来たのダ)と、拳を強く握り締めて司令室へ向かつた。

この頃、戦況は日増しに悪化の度を極め

ており、練習生の中にも卒業を前に一般の航空隊に配属され、遠き南の島に散つた者も多かつた。

中村には自信が有つた。(今の自分なら、必ず敵艦を撃沈出来る)自分自身の心に言

い聞かせた。

「中村飛行生、入ります」

そう言つて司令室の扉を開けた。中には、大沼指令長と、他に四人の教官が立つて中村を待つていた。

「コホン」と一ヶをして、中村に告げた。

一ヶ、中村飛行生は、本日付けを以て、当飛行教育課程を修了した旨を認め、ここに卒業証書を授くる。

一ヶ、中村飛行生は、本日付けを以て、飛行曹長に任命する。

一ヶ、中村飛行曹長は、明後日、昭和十九年八月十日、午後零時を以て、土浦霞ヶ浦航空隊に於て、教員訓練を受くるを命ず。

以上。

「良かつたな中村、このご時世に教員の道を歩めるんだ、お前は幸せ者だぞ、頑張れよ」

教官達は口々に中村の昇進を称えてくれた。これは大抜擢であつた。しかし、確かに中村は飛び抜けて優秀ではあつた。が、決してそれだけではなかつた。特攻が相次ぐなか、教員までが曳航機に乗つて行く為、教員の数が激減していたことも、その要因

であった。

その頃、七月七日の日本軍サイパン島守備隊が玉碎したのを期に、米軍はそこに、

大々的な日本本土空爆を行つべく、巨大滑走路の構築に着手していた。中村が司令室から戻ると、井上が一人で隊舎の外で待つていた。

「どがんしたとか?」中村が聞いた。
「先輩、決まつたんですか?」井上は寂しそうな顔をしていた。

「ああ、決まつた」

「じや、先に逝かれるんですね」

「オイ、井上、早とちりするな。俺はまだ飛ばせてもらえんとよ」

「エツ、どういう意味ですか?」井上は不思議そうに中村の顔を見た。

「俺の腕はまだ未熟だから、もう一度予科練から遣り直しだとさ」

「マツ、また予科練ですか?」

「ウン、今度は教員の訓練を受けろとさ」

「本当ですか! 良かつた。うん、本当に良かった。私はてっきり特攻に行かれるものとばかり思つていました。そうですか、先輩は流石ですね。練習生から一気に教官に成られるんでですから」

井上は喜んでくれたが、中村は内心落胆していた。(やつと死ねる)と、思つていた

のに、又、その日が先送りとなつた。八月八日、隊舎の西窓から暑い陽が差し込む夕暮れのことであつた。

八月十日の朝は雨が降つていた。「營門まで送る」と言う井上の言葉を断つてジープに乗り込むと、「先輩の活躍を・・・自分は先に、九段の靖国神社で待つて折ります」と、井上は敬礼をした。真夏の雨が冷たく感じた。

(つづく)



山谷

俺の場ちか。今現在にある絶望。
では、どうして、て場ちかの離脱
がなされなければ、みじめいか
考えた誰にもわからぬ。しかし誰でも
無意識的にわかつてゐる、認識の
問題。

血と夢

俺はたまにかためにこの世間に
生まれて来たのだ。うう
どうして、でも生きていかなくて
は"と思つて来はじもう今日
生きなければ、生きよう、
自然に、でも不自然に
天下を取るまで、俺の天下
を取るまで、よし!!
木一んレスの今誰が俺く
なつてやう。

仁義なき闘い

山篠で生きて8年間
毎日のようによじきり常識
手のひらをかぶせ300%くじ
くじをしたて同じ毎日
いやな毎日が続く
塩とかしょうゆ、みそまでモ
よきあされる、いやになる
でも俺も同じ仲間

誕生日とハガキ通じて

新潟もどうう
梅雨入りました。

高橋 美香



「Nさんはもうすぐやられしがる歳でもないよー。」「そんな日せざれだ」「どうでもここよー」
なぐや口では毎日おんなじ言葉けど、この中では、何かと感じをめぐらすことも多い
のでは。数十年前この田から生きてるのか、と私は毎日じっくり味わうのだ。

「お誕生日に命がけでくるのか」と兄弟におきめられた賞えがある。

小学校の頃から友達の誕生日には、時には徹夜するほど描画中に、なって
プレゼントを作っていた。どうも興味たるもの渡すのは、私が「もうないんじやない
いか、なんていってあと作るのが好き」といってもあって。母曰く「いつもの
作品が出来た」と、深夜、家族が寝静まっているも、腰動かさないで、ガタ
ガタながら私に「お誕生日に家族もあきれてしまって」と、母は樂しかったことだ。

○ハナミオトナの知り合いでおせあやん! 花束をもてた。「ねねえ、今日は朝から
お誕生日だなあ…誰も来れないかもしれないけど…と田代でいたのよ」と、花束をつか
みながら眺めてつぶやいた。こへになにも(失禮)お誕生日はないと長嘆いた。



井田 私は自分で誕生日を迎え、心地の涼に身を任せた。(「お誕生日はせんじつか」)
花束を手取った花束を机の上(小学一年生)からカーテンをもらった。机の上
に置かれた花束は、「おめでとう、おめでとう」と喜んでいたのを感じさせた。しかし
あたし、どうしてこんな風に思えたのかと笑しながら何度も繰り返し語った。
一日に一回、花束と花束まるごとに風をもってまた歩き出す。「どうでもいいなって
いながら、いつもやぱり特別な一日なんだと思つ。

あかい花

はり師いが丸

村上春樹の「羊をめぐる冒険」に「世の中に文句があるなら 子どもなんて作るな」というセリフがある。(いつしか流行った「ノルウェイの森」などは、十頁も読まずに止めてしまったが) これは名言だと思う。理解できる、きついセリフだ。

では、子どもを奪われた者はどうすればいいのか? 聞うのみである。時には疎ましいほどに、命ある限り聞い続けるであろう。他者からそのための聞いを止める理由を差し出されようとも。

普段、読売やサンケイや文春や新潮を読まないので、イラクの人質事件の折、人質となった人たちとその家族への「自己責任論」がどのあたりから噴出してきたのか定かでない。ただ、彼らが解放され、彼らがまずイラクへの意思を口にした時、国内の視聴者が怒りを表したことは見えた気がする。また、彼らが、例えは企業などの組織から派遣された者でなく、自分の意志で戦地に赴いた人たちであったことも快く思われなかつた要素なのではと推測する。日本人には「自由にやれているように見える人」を妬む習性があるからだ。趣旨は知らないが、吹き荒れる批判の中には「これは拉致問題とは違う」と題したものも出ていた。けれども小泉訪朝後に至っては、家族会の人たちが会見で表した憤りに対し、何百件もの批判が寄せられたという。これらは、別問題なのだろうか?

ひとつ共通して言えるのは、私たちが目にするテレビの報道は、自分の目で見たものではないということだ。テレビ局のディレクターがdirect(ディレクト:監督・演出)している「作品」である。先に帰国した被害者の家族の帰国の映像の直後に、家族会の人たちの憤った姿を挿入するのも、それは、エンターテインメントとして、劇的な印象が強く残るためだ。人質事件では、解放された彼らがその時いたのはテレビの中ではない。イラクの大地である。日本の視聴者でなく、イラクを慮った言葉が口をついたのは、自然なことではないのか。

会見に臨む家族の姿を見た時、私はまず、この家族の想いが、被害に遭った彼らの子供に届けばいいと思った。幸いにも彼らには家族がいる。叱咤することがあるならば、彼らがする。案じた想いの強さも彼らが伝えるはずだと。

詩人・金子光晴は、ひとり息子を徴兵から免れさせるため、息子を小部屋に閉じ込め、生松葉でいぶしたり、雨の屋外に一時間以上素っ裸で立たせたりして、持病の喘息を再発させようとした。彼は書いている。「それは、ただ、肉親愛のエゴイズムだけとは言えない僕らの気持だった。戦争に対して、もう一銭も支払いたくないというのが本心で、その他に、どこまでこちらの主意を押し通せるかという競争もあった」(<詩人>より引用)

国は自己責任という言葉にすり替え、その国に籍を置くものを切り捨て、その民は「子どもを売り渡せ」と仮面をかぶりながら石を投げる。聞うのは大義のためではない。家族のため、であるのに、だ。

「戦争は人を狂わせる」と経験者は語るが。

地獄

‘44

山谷寄せ場で ハヤというまで
はじめられ、これでも仲間で
あり続ける、山谷の人
ハヤだ、いやだ、でも仲間と 44 4.4
一緒に生きている

「日付かず
泄獄か現出じいた
二の土色獄のためか
歎きぬれ
ニカラレばん」

編集後記

ご無沙汰しました、こんにちわ！
久しぶりの夜な夜な編集作業は体に
こたえます。しばらくお休みをいただ
いている間に、露宿も30号突破。年も
とるわけです。どうにもこうにも体が
きしきしするので、整形外科でレント
ゲンを撮ったら、腰骨がきれいに曲が
っているではないですか一腰痛体操
1・2・3！

あじさいの季節から、ひまわりさん
さんの季節へ、心だけはまっすぐ進
いでいきたいものです。——それでも
くねくねくね坂をいくかな、汗か
きかき、雨はしとしと、ざーざー、び
かぴか。

(お)

露宿ベン俱乐部短信

梅雨から夏へと季節が進んで
いきます。筆が進む仲間、滞る
仲間、久し振りに顔を出す仲間、
新しい仲間、誰かが必ず楽しみ
に読んでくれたり、心配してく
れたりします。書き続ける事で
何かがきっと変わって行く事で
しょう。雑誌上のつながりをも
つともっと大事にしていきたい
ものです。

次号32号は9月1日発行予定です。
原稿締め切りは8月4日必着にてお
願いします！

Rojuku

定期購読大募集

購読費・スポンサー費

送り先

郵便振替口座

00160-6-190947

「ろじゅく編集室」

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくれました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

「ろじゅく」

[露宿定期購読の御案内]

毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。

定期購読8回分 5000円（郵送費込み）

定期購読4回分 2500円（郵送費込み）

一回ごとの購入でも大歓迎。

一冊は送料込みで660円となります。

申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、

10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

路上文芸総合雑誌「露宿（ROJUKU）」第31号 2004年7月1日発行（隔月刊）

主宰・笠井和明 編集・発行・ろじゅく編集室 〒160-0023 東京都新宿区西新宿4-32-4-603
TEL/FAX 03-3373-9878/090-3818-3450（笠井）

Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・<http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/>

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

販売協力・新宿連絡会、露宿ペン俱楽部

印刷・株式会社ラジオグラフィー

定価500円